

四 當然解決すべき生死問題

支那唐の神宗皇帝の時に、蔡君謨と云ふ人がありました。或時宮中に御陪食仰付つて、陛下は殊の外御機嫌である。「汝は實に美しい髻をもつて居る、全體夜眠る時は如何して置く、蒲團の外へ出して寝るか、納めて寝るか」との仰せ。今迄一向そんな事心配しなかつた蔡君謨、「アハー」と云つたきり、一寸御返事に困りました。さて宅へ歸つて寝てから、氣になつて堪まらぬ。俺の髻は至つて上等と見える。今日は畏多くも、天皇陛下から御褒めに預つた。これは一體どうして寝んで來たものか。又どうして休んだらよいものか。夜の間に摺切れてはならぬと。蒲團の外に出せば、何だか顎が捻ぢ上げられるやうだし、蒲團の中へ入れては、如何やら押へ付けられるやうだ。さりとて横になつては、髻の癖が悪くなる。如何しても落付かない。出して見たり入れてみたりして、到頭一夜中髻の始末に困つて、眠られなると云ふ話があります。

思へば私共も、この人生問題と云ふ長い髻を提げてゐる。平生何も氣がつかない場合はそれで濟んでも、イザとなると薩張り解らなくなつて來る。にも拘らず私共は果して、之に心を懸けて居るか。自分の生活問題や愛欲名利のためには、血を吐く思で數日を苦しんでも、果して人生問題や、死生問題のために、一夜を泣き明した事があるか。誠に蔡君謨の長髻話にも及ばない。慚愧の至りではありませぬか。所詮人生に當面して自覺し來らねば、問題は起らない。問題が起らなければ、従つて最後の解決は得られない譯。

十三年間留學の功を積んで、支那から元氣よく歸朝したといふ、眞觀大徳の許へ、四方より我勝ちにと訪問し、十三年間の出來事や、見聞についての珍談を聞かうとした中に、一老僧ありて、「貴師は長らく支那にあつて、天台

を學ばれたさうでござるが、草木國土悉皆成佛と云ふ佛説は、充分御研究あつたであらう。草木成佛の仕方は如何なるものなりや、御知らせを蒙りたい」と、差出がましく尋ねましたら、大徳は黙して何の返答もない。よつて、ハ一十三年間留學と云ふ名は立派なれども、山水の風景などに現をぬかして居たと見える。一泡ふかしてやらうと云ふ心組で、再三再四同じ質問を繰返した處、眞觀威儀を正して「草木國土悉皆成佛の相を御尋ねは結構でござるが、草木國土の成佛より御邊の成佛は如何でござる。最早決定相成ましたか」の一言、グツと老僧の胸を刺した。老僧覺えず「イヤ誠にお耻かしうございます」と答へたので、眞觀は再び口を開かず、退席せられたと云ふ話があります。

焦眉の急と云ふは、只この生死解決、求道解脱の一事である。我等の眞實の問題とすべきは、生活の問題でない、成功の問題でない、人生の問題でない、信仰の問題でない、躍動の問題でない、歡喜の問題でない、稱名の問題でない、思想の問題でない、行爲の問題でない。唯々我等の救濟の問題である。道を求むると云ふは、この救濟の問題の解決に外ならぬのである。